

在日華僑の「中国文化」観と華僑文化の創出

- 横浜華僑による獅子舞の伝承形態から -

張 玉 玲*

The Creation of Overseas Chinese Culture in Yokohama: The Changing View of Chinese Culture Through the Succession of Lion Dance

Zhang Yuling*

Abstract

This paper discusses the creation of Chinese culture in Japan through the historical development of “lion dance” among the Chinese community in Yokohama. The lion dance we see today, which is regarded as one of the traditional Chinese entertainments, was started by Cantonese immigrants as a dance dedicated to the Guandi god. However, Chinese culture including the lion dance was suppressed in Japan during the WW II. Through a renaissance, the younger generation has molded their national identity while transcending the boundaries of their local culture. Since the 1960s, two graduate associations of local Chinese schools have taken major roles in the succession of the lion dance among the community, until it eventually became a cultural symbol of Chinese tradition in the 1980s. Through cultural exchange with overseas Chinese, especially in Southeast Asia since the 1990s, they identified themselves as local Chinese in Yokohama as well as a part of the global Chinese community. At the same time, the tensions between Chinese and Taiwanese in Yokohama have decreased. Chinese in Yokohama are currently creating their own culture, which has been referred to by Japanese as Chinese culture, and is named by themselves “Huaqiao wenhua” (overseas-Chinese culture). Thus the meaning of being Chinese in Japan itself is changing today. The historical transformation of cultural activities like the lion dance performed by Chinese in Yokohama represents its unique and dynamic nature.

はじめに

伝統芸能としての獅子舞は古くから祭祀と深く関わっており、これまでの獅子舞研究も、中国伝統演劇や祭祀に関する研究のなかで言及されてきた(田仲:1981等)。在日華僑の間に伝わる獅子舞についての研究

も同様である。特に獅子舞(南方獅子舞)は春節や閏帝誕など華僑の伝統祭祀に行われてきた芸能であるため、華僑の「中国文化」への帰属性や中国人アイデンティティの変化・変容度を示す重要なシンボルとなっている。横浜中華街に居住する中国人の職業・婚姻・教育の現状を踏まえた上で、

*名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程国際コミュニケーション専攻

1970年代の華僑経済・社会・文化を分析した山下は「(横浜)中華街の景観が観光化したことにより中国的色彩を濃くする一方で、中国の伝統文化はしだいに形骸化している」(山下1979:48)と指摘し、尾上は、特に横浜の華僑総会の分裂によって、祭祀行事と芸能との関係は疎遠となり、祭祀行事の宗教的色彩が希薄になったと指摘しながらも、伝統的な芸能は消滅することなく、興行化することによって存続していると述べた(尾上1983:378-384)。更に、王維は、長崎、神戸、横浜における華僑の祭祀と芸能に関する華僑各組織への調査・分析を行い、華僑の伝統文化が変容したことから華僑エスニシティが再編したと論じた(王:2001)。また、「伝統芸能の伝承が戦後途絶えた長崎・神戸と異なり、横浜華僑の特性として、伝統芸能が根強く伝承されてきた」原因は、横浜が「比較的閉鎖的なローカル・コミュニティを維持してき」、「華僑社会内の伝統的紐帯は根強い」からだとして、分析した(王2001:296,303)。

上述の先行文献、特に王の研究は、日本華僑による伝統文化の継承と華僑エスニシティの関係を明らかにし、日本の華僑社会における中国伝統文化の歴史的発展を示唆している点で興味深い。しかし、「伝統」は歴史や社会の中で常に創出されるものである(Hobsbawm:1983)ように、「文化」も不変なものではなく常に創り出されていくものと見るとき、日本華僑による「伝統文化」は果たして本来の意味での「中国(出身地)文化」であり続けてきたのだろうか。実際、日本の開港と共に形成した華僑社会は既に150年の歴史を持っている以上、故郷から持ち込まれてきた中国文化が変容して

きたことは否めないだろう。問題は、出身地や方言、習慣などが異なる華僑が抱えていたローカルな文化がいかなる形にまとまってきたか、また、華僑自身の意識がいかに変化してきたか、ということへのミクロな分析である。本研究は、横浜華僑による獅子舞の伝承過程を時代順に整理し、獅子舞の変化及びそれに対する華僑の「中国文化」への意識変化を分析し、独自の華僑文化の形成過程を明らかにしようとするものである。

『在留外国人統計』(平成13年版、第8表)によると、2000年現在横浜市に登録された中国人の数は16,732人で(神奈川県24,438人)そのうちの4,750人、4分の1以上が中華街の所在地である中区に集中している。本稿で扱う「華僑」は、1980年代以前から横浜に暮らす「老華僑」に属する人々とその子孫であり¹⁾、その中には日本に帰化した「華人」も含むため、正確な人口は把握できないが、およそ4,000人ととも5,000人ともいわれる(可児他編2002:790)。また、「日本一」を誇る大規模な中華街を有しながらも、中国と台湾の政治的イデオロギーの対峙によってコミュニティが二つに分裂したことは、神戸や長崎などの華僑社会に見られない横浜独自の特徴である。

研究を進めるに際し、文献やインターネットでの調査のほかに、横浜華僑の各組織、獅子舞チームへの聞き取りに重点を置いた。獅子舞に関する情報を数多く提供していただいた横浜華僑青年会龍獅団団長唐朱維氏や横浜中華学院校友会謝賢栄氏、及びインタビューに応じてくださった獅子舞に携わっている多くの方々に感謝の意を表したい。

広東出身者と獅子舞： ～1945年

1. 南方獅子舞の起源

そもそも中国に生息していない獅子は、龍・虎・亀・蛇ほど中国人の生活、文化、信仰に関わっておらず（鍾1991：19）、「神扱い」されていないのだが、神に忠実に仕える勇猛な聖獣として民衆に親しまれてきた。それは獅子に関する様々な伝説から窺われる。

例えば、一説には、シルクロード交易の発達と共に、ペルシャ商人によって皇帝に本物の獅子が贈られ、時の権力者達はその百獣の王の勇ましさを大変気に入り、その後獅子は招福驅邪の聖獣として崇められていった²⁾、とある。また、災いを鎮め、邪悪を避けるものと考えられていた獅子が仏教に伴って中国に伝えられ、獅子は天龍の九人の息子の一人で、門を守るものと信じられ、秦漢以来、宮殿や府邸の門の両端に石獅子が置かれるようになった³⁾、というような説もある。

獅子舞については、中国の史料にその記述が見られる。『漢書・礼楽志』にある「象人」は、三国魏の人孟康によって「今の魚、蝦、獅子を演じる芸人のような者」（象人、若今戲蝦魚師子者也。巻22）と解説されているが、これが獅子舞に関する最も早い記述ではないかと思われる。また、『旧唐書・音楽志』（巻29）に、「五方師子舞」とも呼ばれた「太平楽」についての記述⁴⁾があり、獅子舞の雛型ではないかと思われる。『楽府雜録』の中にも「獅子郎」（獅子あやし）の誘導に従い、伎楽「太平楽」を舞い踊る「五方獅子舞」の記述がある⁵⁾。

正確に、中国獅子舞の始まりが何時なの

か、また今日の「北方獅子舞」と「南方獅子舞」⁶⁾の分類が何時始まったかは定かでない。しかし、戦前に来日した華僑が最初に踊り出した「南方獅子舞」は、めったに舞台で披露されない民間舞踊であり、伝承によれば広東省の仏山に起源したという（劉1993：259）。その内容は以下のものである。

明の初期、仏山地区に怪獣が現れ、「口連口連」（lian lian）の泣き声を出しているため「口連獣」と呼ばれた。口連獣は大晦日になると出現し、人間や家畜を襲い、農作物を食い荒らしていた。しかし、人々は口連獣を聖獣だと思って、その被害を受けながらも殺すことができなかった。そこで、人々は、竹で口連獣に似ている一角の獣頭を作り、鮮やかな色を塗り、それを頭にかぶって、畑に伏しながら、口連の出現を待った。同時に、もう一つの獣頭を廟に供えた。口連獣が現れたら、合図として太鼓を叩き、みんなで一斉に出動し、怪獣を追い払うと決めた。ある日の夜、口連獣が現れ一直線に廟に駆けつけた。看守の小僧が恐怖のあまりに怪獣の頭に潜って隠れた。口連獣は自分と同じようなものを見て、近づいてきた。震えていた小僧は益々激しく体を震わせ、机の上の銅鑼を落とした。「チャラ！」と音がしたため、口連獣はびっくりし逃げ出した。小僧は隙を見て「口連獣がきたぞ」とみんなに知らせながら、銅鑼を鳴らした。すると太鼓や銅鑼が叩かれ、畑に伏していた偽口連獣が一斉に駆け出した。口連獣は突然のことでびっくりし、遠くへ逃げ出し二度と現れなかった。その勝利を祝うために、それ以来、口連獣が現れる新年に獅子舞を踊り、一年を予祝した。その後、祝い事があれば、獅子舞を踊るようになった（劉1993：259-260；葉

2000 : 191-192)

ちなみに「横浜中華学院校友会」という横浜中華学院の同窓会出版物にも、類似の伝説が掲載されている。ただ、獅子の原形とされるのは口連獣ではなく、「年獣」となっている（横浜中華学院校友会1997 : 17）。これは恐らく、口連（lian）と年（nian）は、広東語で同じく「レン」と発音される上に、「新年」の「年」と結び付けやすいため、長年の口承を経て「年」と変わっていったと考えられる。

この伝説の信憑性はともかくとして、原初的な獅子舞という形態は庶民が邪気を追い払い、五穀豊穡や幸福を祈願するものとして創作されたと想像し難くはない⁷⁾。仏山の人々が作った、一角で鮮やかな色の頭を持つ怪獣は、後に太鼓と銅鑼の伴奏の下でにぎやかに踊る南方獅子舞の原形となったのだろう。

2. 横浜における獅子舞の展開

19世紀後半に急増した海外への中国人移住者の大多数は広東省出身者であり、彼らによって各地のチャイナタウンに南方獅子舞が伝わっていったと推測されるが、横浜の場合も同様である。横浜開港後、欧米商人に追随し、使用人や買弁（Comprador 中国にある外国商社で雇用されていた高級使用人のこと）として来日した中国人が横浜の華僑社会の始まりとされている。1871年に横浜華僑は660人前後にまで増えたが、広東省出身の者がほとんどであった。従ってその年に成立した「中華会館」が、華僑の登録、墓地の管理および祭祀の運営を行う公共的機関で、同郷、同業組織の範囲を超えた華僑社会の上位組織でありながらも、

やはり広東人の同郷組織の性格が顕著であった。

中華会館では、「天后生誕日（旧暦三月二三日）、旧正月元旦、清明節、端午節、中元節、仲秋節、冬至節など」主な祭祀が盛大に行われ、「五月一三日の関帝祭には夜を徹して戯劇が演ぜられるのが常」（内田1949 : 237-238）であり、横浜華僑の祭祀行事の主な担い手として中華会館は存在した。

また、当時の横浜華僑による関帝祭⁸⁾の様子を記述した『横浜市史稿』には、獅子舞が踊られていたことが掲載されている。「明治三〇年頃、新調金線銀玉を鏤めた縫いくるみの華麗そのものである獅子と龍とは、財貨を積んで作ったものと云われ、祭典当日の獅子舞と龍の玉取舞とは最も勇壮なる彼らの行事であって、「どえんぼあん」と銅鑼の音、太鼓の音を先触れとして、幾旒の大小旗を翻し、降魔調伏の戒具を担って耳を襲するばかりの爆竹の間を練り歩」き、「夜を徹して彼らは狂舞」（横浜市市役所1932 : 579）した、とある。



「関帝祭の獅子舞」（『横浜市史稿』風俗編より）

ここから、獅子舞が初期の華僑社会ですでに祭祀と深く関わっており、横浜華僑の主要な行事となっていたことがわかる。ま

た、広東仏山地区では現在でも関帝誕に際し獅子舞が奉納されている⁹⁾ことから、広東出身の華僑が来日してから獅子舞を関帝祭に導入したのではなく、故郷の伝統をそのまま日本で継承し、他の出身地（三江出身者による龍舞とともに関帝祭で踊られた）の華僑と共有していたと考えられる。

終戦まで、横浜華僑の人口はほぼ増加趨勢を示し、親仁会や要明同郷会、四邑公所など広東出身者の同郷組織¹⁰⁾が次々と成立していった。華僑の教育機関として役割を果たしてきた華僑学校が、終戦まで一貫して広東語で教育を行ってきたのも、華僑社会での広東出身者の優勢を物語っている。1910年に広東人の演劇団体「和親会」が形成されたが、1939年の時点では、料理人や会社員を主とした120会員を有し、彼らが演劇を担当してきた（内田1949：334）。この和親会は戦後まで獅子舞を継承していたと推定される¹¹⁾。

3. ローカル文化としての南方獅子舞

戦前までの横浜華僑における獅子舞について大きくまとめてみると、以下の特徴が見えてくる。第一に、獅子舞は大きな変容はなく広東と同様な風格が保持していたと考えられる。横浜華僑社会は、広東地域から来日した一世華僑が主であり、また、1937年の日中戦争勃発後、来日する中国人は減少したものの、中日間の往来は比較的自由だったため、横浜華僑は新たな来日華僑あるいは自らの帰省を通して故郷文化と絶えず接触できたからである。第二に、獅子舞は広東人コミュニティの「出身地文化」の範疇から超えていなかった。出身地を共にする華僑は幫（出身地や職業別で形成さ

れた相互扶助団体）や同郷団体を組織し、言語・文化的に閉鎖的なサブグループを形成していた。当時大多数を占めた広東出身の華僑は、故郷である広東省の南方獅子舞そのものを踊っていたのである。明治30年前後の関帝祭に、獅子舞とともに、三江公所による龍舞¹²⁾も演じられたが、出身地別に見られる文化の違いが明らかであった。

しかし一方、中華会館による祭祀（関帝祭）の主催や参加を通し、異なる出身地の華僑が徐々に互いの文化を認識し始めたとも考えられる。

中華青年会と獅子舞：1946～1966年

1. 中華青年会による「文化」復興活動

戦時中、日本当局は在日中国人の活動を抑えるために、華僑の経済・文化への弾圧を強めていた。また、戦後、戦争による被害と終戦直後の様々な困難を乗り越えるた



昭和33年中華街の獅子舞
広瀬始親撮影・横浜開港資料館所蔵

めに、華僑が出身地別を問わず、団結しはじめたのである。1946年に復興した横浜の華僑学校が始めて標準語による授業を開始したのはその一例である。

こういった背景の中、華僑青年は、スポーツ振興・知識文化向上を目的とし、「中華青年会」を設立した。初代会長は容振権である。当時、青年会の会員は広東、福建、上海の出身者など、200名を超え、役員は26名であった。会には、文化部、体育部、音楽部、総務部、交際部、観察部（検査部）が設置されていた（王2001：230）が、その中に獅子舞を司る部署はなかった。

この頃の獅子舞は、中華青年会の会員が、宴席の余興として、ダンボール箱と風呂敷きで工夫し即興で踊っていた（王2001：231）。その後、彼らは手製の獅子を作成し、街の祭りや仮装行列などで舞を披露するようになった。これが、獅子舞が横浜中華街の行事になるきっかけである（可児他編2002：789）。

その後、青年会は香港と横浜港を往来する船員¹³⁾に頼んで、獅子頭や楽器一式を香港から購入し、中国や香港にいたことのある会員たちの指導の下で、獅子部を結成した。それ以来、横浜で獅子舞の行事や活動は、中華青年会が担い手となって発展してきた。

毎年、閏帝誕や双十節（10月10日、現在台湾では国慶節として祝われている）に、中華街で獅子パレードや採青（後述）が行われていた。その後結婚式や企業の始業・竣工式や横浜の港祭りなどでも披露されるようになり、賑やかで、めでたい雰囲気を出していた。

しかし、1949年中華人民共和国が成立し、

北京と台湾政府の対立が表面化するや、華僑社会に早くもイデオロギーの激しい対立が現れた。1952年、「学校事件」で横浜中華学校が分裂¹⁴⁾するのを皮切りに、華僑社会も二つに分かれた。こうした状況の中、中華青年会が中立宣言をし、会員募集を見合わせることにした。1960年代の半ばころから、会員の高齢化により、青年会の活動は形骸化し、獅子部も1966年をもって余儀なく解散された。

中華青年会が直面した困難は、横浜の華僑社会の分裂だけではなかった。東・西二大陣営の対峙、及び世界の国々の社会主義中国に対する政治・経済上の孤立・封鎖政策は、言うまでもなく華僑たちを板挟みの窮地に陥れたのである。当時、日本政府は台湾政府と外交関係を結ぶ一方で、中国大陸との関係を一切絶った。50年代前半、中国建設のために「興安丸」などで帰国¹⁵⁾した若者もいたが、大多数の華僑は帰国することを断念せざるを得なかった。中国大陸、故郷との接触が途絶えたことが、華僑青年が香港船員を介し獅子舞を復興させた背景でもある。また、中国と台湾の対立により、華僑は生活の中でも思想信条の表明を強いられたため、中立の立場を取りながら華僑という身分を保持することは困難であった¹⁶⁾。政治に巻き込まれたくない華僑は多くいたが、日本政府が外国人の帰化政策を厳しく制限していた中、日本国籍取得ができず、「大陸系」か「台湾系」華僑の身分を保持するしかなかった。これが、中立宣言をした中華青年会が会員募集を見合わせ、後継者不在となった大きな外部要因ではないかと考えられる。

2. ナショナル・アイデンティティと「中国文化」観の形成

戦時中、日本当局による圧迫と戦後の混乱という運命の共同体意識は、華僑青年が団結し「伝統文化」を復興させる後押しとなったと考えられる。獅子舞伝承の特徴は三点あげられる。まず、この時期の獅子舞は、中国本土の獅子舞と隔たりを持ち始めた。戦前のように広東出身の華僑に直接行われるのではなく、広東出身の香港船員という中間媒介を通して横浜に伝えられたからである。獅子舞の風格に変容がなかったとしても、華僑と中国との文化上の繋がりに隔たりができた、と言わざるを得ない。第二に、横浜華僑の中国人としてのナショナル・アイデンティティは、戦時中日本当局の压制下に芽生え始めたとするれば、この時期では強化されたと考えて良いだろう。前述したように、中日国交回復まで、華僑は、至る所で中国人であることを確認させられていた。華僑がみずからではなく、ホスト社会日本の中国人政策により「中国人意識」を強められたといえよう。したがって第三に、異なる言語・文化的背景を有する華僑は、戦後「出身地文化」を超えて「中国文化」へと意識を変えていった。それは、中華青年会自身が出身地にこだわらずに設立された団体であることと、華僑社会内部の分裂や華僑間イデオロギーの対立などの政治的要因を排除し、中立の立場を取りながら、獅子舞を含むスポーツや演劇などの伝統文化を同じ「中国文化」の範疇で捕らえようとしたことに現れている。

中華青年会の獅子部は解散するにあたって、獅子舞の技術と道具一式を横浜中華学

校校友会¹⁷⁾(大陸系)と横浜中華学院校友会(台湾系)に託した。以来、両校友会はそれぞれのペースで獅子舞を継承し、発展してきた。以下のとにおいてそれぞれの活動を検討していきたい。

横浜華僑青年会と獅子舞(大陸系)：1966年～現在

1. 華僑青年会の活動

横浜中華学校校友会は、中華青年会から獅子舞と道具一式を受け継いだあと、龍獅団を設立し、獅子舞や龍舞を始めた。1970年代後半、青年運動の高まりから校友生以外の広範な青年を結集すべく、「横浜華僑青年会」が設立され、校友会にかわって青年活動を担ってきた。現在青年会の主な活動は龍獅団による龍舞と獅子舞であり、国慶節や春節祭などで意欲的に披露している。1972年日中国交回復に伴い、中国語や中国伝統文化の人気の高まるなか、龍獅団の活動は一層活発になり、活動範囲が日本全国に及んでいた。1980年代から、南方獅子舞だけでなく、謝成発氏¹⁸⁾が代表となり中国に赴き、上海雑技団に師事し、北方獅子舞を学んだ(王2001: 237)。



華僑青年会の獅子舞 2002年閏帝誕にて筆者撮影

現在では、横浜華僑共通の行事である春節祭、関帝誕、国慶節、港祭など横浜中華街の年中行事以外、他の地方のお祭りや結婚式、企業の竣工・始業式などでも活動している。出演料を受け取る場合もあるが、それらは青年会で保管され、獅子の購入や道具の修理及び世界大会に出るための資金に使われる¹⁹⁾。

2. マレーシア華人との交流及び世界獅子大会への参加

1990年に、華僑青年会龍獅団は初めて日本華僑を代表してマレーシアで行われている世界獅子大会に出場した。そこで、マレーシアの華人蕭斐弘氏の道具と技術上の援助を得たことをきっかけに、その後蕭氏を日本に招き、引き続き技術上の指導を受けた²⁰⁾。これが、中華青年会から受け継いだ伝統的な南方獅子舞（前出写真参照）から「現代風」の獅子舞へと転換する契機となった。更に1994年に、マレーシアで行われた別の大会「雲頂世界舞獅錦標賽」（マレーシアの雲頂で行われる世界規模の獅子大会、後述）にも出場し、積極的に他国の華僑・華人と交流を深めようと努めた。一方、台湾系で獅子舞の継承活動を行ってきた横浜中華学院校友会も、後述のように80年代以後、シンガポール華人の交流を通じて獅子舞の技を磨いていったのである。

ここで、横浜華僑（大陸系も台湾系も）がなぜ、中国本土ではなくマレーシアやシンガポールに獅子舞を習うに至ったかを考えてみたい。原因は三つ考えられる。第一に、中国では文化大革命の間、獅子舞などの伝統文化は批判の対象とされ、全面的な破壊を被っていた。全国範囲で獅子大会を

行い、獅子舞を全国各地に発展させようとする本格的な復興活動は1993年からであり²¹⁾、すでに他の国や地域と比べだいぶ後れを取っている。第二に、東南アジア諸国、特にマレーシアとシンガポールの華僑・華人コミュニティは、中国伝統文化の継承に力を継いできた。獅子舞を芸能だけでなく、スポーツ競技として発展させようとしている²²⁾。最後に、現在獅子舞を担っている日本華僑は、華僑三世、四世に当たり、中国への帰属意識が極めて薄い。特に、獅子舞の指導層は文化大革命の時代を経験し、伝統文化への圧迫政策を取った中国に違和感を持っている²³⁾。むしろアイデンティティの確立・維持のために中国伝統文化としての獅子舞の保持発展に努める他国の華僑・華人と、その「共通の民族的立場」と目的意識のゆえに、密接に結びつこうとするのである。

90年代から横浜華僑が参加しつづけている「雲頂世界舞獅錦標賽」は、世界各地の獅子舞チームと競争・交流することによって、民間伝統芸術である獅子舞を世界的スポーツに発展させる目的で、1994年マレーシアの雲頂にて設立された数少ない世界規模の獅子大会である。1994年に主にアジア諸国の華僑・華人であった8カ国の13チームの参加者で始まったこの大会も、回を重ねるにつれ、北米（カナダ・アメリカ）、ヨーロッパ（イギリス・フランス）、アフリカ（モーリシャス）アジア（中国・香港・インドネシア・台湾・シンガポール・日本〔横浜の2チーム〕・タイ・ベトナムなど）数多くの華僑・華人が参加するようになった²⁴⁾。

龍獅団団長唐朱維氏はインタビューの中で獅子舞の世界大会について以下のように

語った。

こういった世界獅子大会に出るのは、世界レベルの獅子舞を目指すのももちろんのこと、世界の華僑・華人と絶えずに交流を保つことが最も重要だと考えているからだ。マレーシアや香港にいる華人の友人と交流を重ねていくうちに、彼らと同じ中国語で交流を行っているが、彼らの文化が日本華僑のそれとはだいぶ違うことに気づいた。日本では、本人に意向があれば誰でも結婚式で獅子舞を披露してもらえるが、香港ではお金持ちしかやらない。結婚対象でも、日本の華僑は簡単に日本人と結婚するが、マレーシアでは、宗教などの影響が華僑同士の結婚が多い。(日本の華僑は)日本人と顔も似ているし、日本文化の吸収にそれほど抵抗感がないのであろう。獅子舞や清明節などの伝統的な文化を大事にしなければならない²⁵⁾。

つまり、ほかの国の華僑・華人との交流を通して、日本華僑は世界の華僑との違いとともに共通性や文化的絆をも確認しているのである。現在、青年会龍獅団は日本代表として獅子舞の世界的組織「国際龍獅總會」(本部は北京)に登録し、他国の華僑・華人と交流しながら、雲頂世界舞獅錦標賽の他にも世界大会に出場しようと心がけている。

3. 継承者予備軍としての華僑学校の生徒

華僑青年会の「母体」となる山手中華学校は、中国の伝統文化を学ぶことを学校教育の一環として重視している。また、獅子舞の習得に子ども時代の体験も重要だと考

えられ、学校の遊芸会などの行事で子どもたちにも獅子舞を知るチャンスを与えようと、幼稚部と小学部の子ども用に太鼓や獅子道具を用意した。横浜華僑婦女会が運営する保育園「小紅」まで、子ども用の獅子舞道具を購入し、定期的に子どもたちにあそばせている。中学生になると、週に二回龍獅団のメンバーと共に、学校のグラウンドで練習を行う。中学生たちはここで太鼓の叩き方や踊りの基本的な技法を身につける。また、大きな行事の前、獅子舞の見習いとともに、準備の手伝いに加わり、行事の段取りや雰囲気馴染んでいくのである。一方、中学生メンバーは「横浜山手中華学校獅龍部」の部員として、学校行事や他の学校との交流も行っている。山手学校を卒業し高校に入ってはじめて一人前のメンバーとして本格的な練習が始まる²⁶⁾。このように、華僑学校は獅子舞継承者を育成する文化的基地としての役割を果たしているといえる。

ちなみに、山手中華学校獅龍部の部員は全員「老華僑」ではないことを強調しておきたい。2002年度の関帝誕のイベントに出場した山手学校の代表8人のなか、4人が「新華僑」である²⁷⁾。華僑の帰属意識の変化と日本国籍改正法の影響で、近年「老華僑」の人数は減少したことと、中国の改革開放政策による新華僑の増加が、山手中華学校の生徒構成を大きく変えたのである。2002年現在、全生徒数320名のうち、老華僑が8%未満であるのに対し、新華僑は45%、華人は25%²⁸⁾を占めている。いずれ老華僑はいなくなるとの声の中、伝統文化を引き続き新華僑に担ってもらうことが新たな課題としてあらわれたのである。

4. 華僑青年会による獅子舞とこの時期の特徴

上述した華僑青年会の活動及び獅子舞の伝承形態から、90年代に世界舞獅錦標賽に出場したのを境に、華僑青年の中国文化観とアイデンティティの関わりを前後二つの時期に区切り、論じてみたい。

前期では、中日国交がなかった状態で、華僑青年会は獅子舞を受け継ぎ、それを先輩から後輩へと伝承していった。この時期、中国との交流を計ることが出来ず、日本社会でも正当な位置を与えられていなかったため、華僑の経済・文化は、華僑コミュニティ、しかも大陸系華僑のコミュニティという閉鎖的な枠に限定されていたのである。こうした中、華僑が従来文化を守りながらも、中国から得たわずかな情報を基に想像を加え、祖国「中国」及び「中国文化」への概念を作り出したと考えられる。50～70年代を経験した者が中国文化に執着し、中国人意識が強かった²⁹⁾のは、民族教育による結果であるとも考えられるが、上述した要素が大きいのである。

一方、80年代から中日間における経済・文化領域での交流が盛んに行われるようになり、中華街が日本の中の「中国文化」として多くの日本人観光客から注目され始めた。この中で、「中国的」中華街建設の一環として、華僑青年会龍獅団は北方獅子を導入したと考えられるが、同時に、華僑青年たちが、中国獅子舞の二大代表である南方獅子舞と北方獅子舞を合わせ、「中国文化」のシンボルとして「中国獅子舞」のイメージを完成させようとしたのであろう。

後期では、90年代から参加している世界

獅子大会を通し、世界の華僑・華人による獅子舞と合流できた。他国の華僑・華人との交流から、日本華僑は、獅子舞だけでなく、互いの文化上の異同に気づき、文化的アイデンティティを共有すると感じる一方、日本華僑としての独自の部分も認識した。こうして、横浜華僑は、自らアイデンティティをより多面的かつ開放的なものに変えていくと同時に、上の世代から受け継いできた獅子舞を基に他国の華僑・華人から新たな要素を取り入れつつ、横浜華僑の伝統文化を強化しようとしているのである。この伝統文化の創出は、横浜華僑だけでなく、他国の華僑・華人も参与していることから、地域性と共にグローバルな性質も持っている、と言えよう。

現在では、150年前華僑によって横浜に持ち込まれ、世代交替しながら伝承されてきた獅子舞の一翼は、新華僑が担っている。新華僑の子ども達は、山手中華学校で中国語と共に、中国国内の学校で習うことのない獅子舞などに接することによって、伝統的な華僑社会と繋がることができたのである。したがって、華僑学校は、新華僑を獅子舞などの伝統文化の後継者に育成することや新・老華僑の融合に媒介的存在として大きな役割を果たしているといえる。このように、華僑学校を中心に行われている新華僑と老華僑、卒業生と在校生の交流は、華僑の伝統文化の継承・再編のみでなく、転換期にある華僑社会の今後の発展にも大きく作用するものと考えられる。

横浜中華学院校友会と獅子舞（台湾系）1966年～現在

1．華僑青年会との相似性

獅子舞の継承・発展において、台湾系の横浜中華学院は大陸系の華僑青年会とほとんど同じような道のりを辿ってきた。

まず、1966年中華青年会から獅子道具と楽器一式を寄贈されたのを期に、同年4月、中華学院校友会醒獅部が正式に成立した。それは1972年頃、「醒獅部」と「舞龍部」が合併し、「龍獅部」となった。また、香港へ部員を派遣し、中華青年会から受け継いだ南方獅子舞を古典と現代をミックスした独自の獅子舞に創作しようと意欲的に取り組む一方、80年代にシンガポールから北方獅子舞を導入した。校友会の活動範囲も、春節、閏帝誕、港祭、国慶節など華僑青年会のそれとほぼ同じである。70年半ばから後半まで閏帝誕の祝いを兼ねて、何回か獅子大会を開き、多くのプログラムを披露した。1996年に、中華学院校友会は雲頂世界舞獅錦標賽に初出場して以来、シンガポール華人との交流を保ちつつ、獅子舞の技を磨いた。2002年7月には第五回大会で日本代表として初めて予選を突破した。また、横浜中華学院は山手中華学校と同じように、獅子舞などの伝統文化の後継者育成に重要な機能を果たしている。中華学院には在校生主体の龍獅団が設立されている。そこに所属する団員は校友会の指導を受けながら獅子舞の技術の習得に励み、そして中華学院を卒業すると同時に校友会の一員として迎えられ、以後その活動の傍ら後進の指導に当たるのである。親の仕事の関係で台湾から来日した子ども達は、横浜中華学院で初め

て獅子舞に触れ、感動を覚えたという³⁰⁾。

以上、大陸系と台湾系華僑の獅子舞の伝承過程、形態に見られる相似性は、同じ華僑コミュニティを母体としたことに由縁し、彼らの「中国文化」観の同質性を語っている。近年、「老華僑」が徐々に減少していく中、如何に新華僑に獅子舞を継承させていくか、両チームにとって共通の課題である。また、獅子舞を地域社会の人々に教えることを通して、日本社会に華僑文化の理解を促していく上でも、ホスト社会への融合を促進するにも、両者の交流と協力が必要なのである。

2．儀礼の復興

横浜中華学院校友会による獅子舞伝承の特徴として、シンガポールから獅子舞を導入すると同時に獅子舞の儀礼に再び注目し始めたことがあげられる。南方獅子舞、特に鶴山獅子舞³¹⁾の厳格な決まり事³²⁾には儒教思想が含まれており、中国の「伝統文化」を復興させようとした点で横浜華僑の注目を引いた。以下、「採青」や閏帝廟および「点睛」を取り上げ、華僑青年会との比較で横浜中華学院校友会による獅子舞の継承を見てみたいと思う。

(1) 採青

採青は、獅子舞の一動作としてチームのレベルを評価する上で欠かせない部分となっている。「青」は「清」と同じ発音で、「採青」は「採清」であり、即ち清を打倒することを意味することから中国清末に流行した、と獅子舞に携わる者の間で考えられている。清末の「反満」運動の高りのなかで、「採青」がこの意味合いを重ね合わせて獅子舞の一動作として広まったという可能

性は否定できない。

「青」には、茎がついている「生菜」(レタス、「金儲け」を意味する「生財」(sheng-cai)との音通)をそれに見立て、その上にお金や煙草を張り付け高いところにつす。獅子はまずパフォーマンスし、それから「採青」する。「採青」は必ず順調に行わなければならない。獅子は「食青」後、「吐青」する。そして、縁起の良いように、吐いた「青」を依頼人に向け、投げなければならない。

商売人は、商売が繁盛することを望む。従って、「金」や「儲かる」などを何らかの形で表わすものが「青」とされる。「生菜」はもちろんのこと、「金」色のバナナや蜜柑もよく用いられる³³⁾。「採青」は、種類が多くなり、内容も豊富になったが、華僑が「採青」を通して、商売経営上の厄を払い吉祥を迎える伝統は、かつてに勝るほど重視されている。

(2) 関帝廟と点睛

関帝廟は「関羽」を祭るところであり、獅子は、神のお使いを務める霊獣だという信仰から、昔から関帝廟と深い関係にあった。関帝誕の拝神儀式が行われる前に、まず獅子舞を踊り、神に奉納する(華僑青年会と中華学院校友会が年度毎に交替で行う)。また、その後、横浜華僑の各龍獅団、時に神戸やシンガポール華人による獅子舞と共に龍舞や民族舞踊が演じられる。『横浜市史稿』(前出)に掲載された明治末年の獅子舞の口絵は、関帝祭後の祭神活動だと考えられる。

獅子は神から命を授かってはじめて人間に吉祥を持ち運ぶことができる。従って、新しく購入した獅子には「点睛」を行わな

ければならない。これは新鮮な鶏の血を獅子の角や目と鼻に付けることによって、神の魂を獅子に取り入れる儀式である。「点睛」は、華僑に関しては関帝(神)の前で行うことになっている。なお、女性の立ち入りは禁止されていた。しかし近年、新鮮な鶏の血を手に入れにくいこともあって、血の代わりに朱砂が使われ、また、2001年横浜婦女会館(大陸系)落成記念のために購入した獅子の「点睛」儀式は、婦女会館の前で、婦女会長によって行われた。

このように、関帝廟に関わる華僑青年会龍獅団が行う獅子舞儀礼は、信仰的な意味合いが徐々に失われて形骸化していった。一方、この点に関して、中華学院校友会はシンガポール華人を通して再び重視し始め、前者と一線を画している。この違いに関しては、台湾と中国本土の伝統文化への対応の違いが華僑に影響を及ぼすことも看過できない。華僑青年会による獅子舞が信仰から離脱し、よりパフォーマンス化しつつあるのは、華僑青年が中国国内の文化大革命や男女平等を唱えた「婦女解放運動」及び改革開放の影響を受け、伝統文化への執着が徐々に希薄化していったことに原因があると考えられる。

3. 脱イデオロギーの「伝統文化」

このように、横浜の華僑社会における獅子舞は大陸系の華僑青年会と台湾系の中華学院校友会の双方で継承されてきたが、1986年には、横浜中華街の町おこしの一環として、大陸系と台湾系華僑が思想信条を超えて協力し合い、春節祭りを共催した。また、1990年に火災で焼失した関帝廟の再建は、両者の協力によって完成された。そ

れ以来、30数年間も続いた華僑社会の緊張状態は徐々に緩和されてきた。更に、1993年に中華街発展会協同組合（1970年代成立）を母体として設立された「街づくり協議会」は、両校友会を含む大陸系と台湾系の24団体から組織され、まさにイデオロギーの対立を超えた「画期的な意味をもつもの」（王2001：249）である。横浜中華街を豊かな「中国文化」を受け継ぐ商業町・観光町に築いていくことで一致している大陸系と台湾系華僑の新たな関係は、横浜の華僑文化の発展に大きな影響を及ぼす一方、華僑の新しいアイデンティティの形成を左右する大きな要因となると、考えられる。

近頃、日本各地に散在している獅子舞・龍舞チーム間の連携、また世界龍獅総会と緊密な連絡をとるために、2003年までに横浜に日本の「龍獅総会」が設置されることになった。そのために、「準備委員会」が設置され、横浜青年会と中華学院校友会はその主体となり設置の準備に取り組んでいる³⁴⁾。父親から孫まで四世代とも獅子舞に携わってきた謝成発氏の言葉を借りていえば「台湾と中国は相変わらず二つになっているが、伝統文化は一つだから」³⁵⁾、今回の協力は、伝統文化を通した大陸系と台湾系華僑の融

和が既に軌道に乗り始めたことと、横浜の華僑青年が在日華僑の代表として日本の華僑文化を世界に発信する役割を積極的に担おうとしていることを示している。

獅子舞の伝承形態の変化と華僑文化の創出過程

これまで見てきたように、横浜華僑社会における獅子舞は、戦時中の压制や戦後の混乱を乗り越えて中止することなく粘り強く伝承されてきた。

今日にかけての獅子舞の伝承過程と華僑文化の形成過程は大きく分けて、表1のようにまとめることができる。以下、これにのっとり、獅子舞の伝承過程を四つの時期ごとに、戦前の出身地文化の保持から今日の華僑文化の創出まで、華僑アイデンティティの変容過程との関連で考察していきたい。

第一期では、獅子舞は主に広東人の「出身地文化」として日本、特に横浜の華僑社会に持ち込まれてきた。戦前、出身地別の相互扶助の組織・団体は形成したが、それは互いの言語・文化上の違いから、各自の利益を守ることを目的とした閉鎖的かつ排他的な幫派でもあった。広東出身者が多数を占め

表 1

時期	第一期	第二期	第三期	第四期
年代	～ 1945 年	46 ～ 66 年	66 ～ 90 年	90 年～現在
伝授者	広東出身の華僑	広東出身香港船員	南方獅子舞：中華青年会 北方獅子舞：上海、シンガポール華人	シンガポール、マレーシア華人
継承者	広東出身華僑一世	中華青年会に属する華僑青年	華僑青年会（大陸系） 中華学院校友会（台湾系）	華僑青年会 中華学院校友会
獅子舞の特徴	南方獅子舞、広東地方と同様な風格と考えられる	南方獅子舞、香港獅子舞維の風格に近い	南方獅子舞、伝統的風格を保持 北方獅子舞の導入	北方獅子舞、南方獅子舞、競技化、開放化
華僑文化変容過程	出身地文化	「中国文化」の摸索	「中国的」文化の継承・発揚 華僑社会の発展	「華僑文化」の創造へ
華僑アイデンティティ変容過程	ローカル（出身地）・アイデンティティ	中国人アイデンティティ、ナショナル・アイデンティティ	ナショナル・アイデンティティから多元的なアイデンティティへ	ローカル（地域社会）及びグローバルな華人アイデンティティ

た華僑は、春節や閏帝誕に獅子舞を踊ったが、他方で少数の三江出身者が龍舞を踊ったことから、同じ中国人でも出身地ごとの違いが自覚されていたと思われる。こうして、第一期の華僑は、ローカル・アイデンティティに根ざした出身地文化を保持していたことがわかる。また、獅子舞などは個々の華僑にとって出身地文化であっても、ホスト社会の日本からみれば中国人社会で行われている「中国文化」として映ったのである。

第二期では、獅子舞は出身地の区別をなくした中華青年会によって復興された。中国との交流は中断されていたが、横浜華僑は広東出身の香港船員に獅子舞を指導してもらい、間接的に中国の文化と接することができた。幼い頃から獅子舞に携わってきた謝賢栄氏が指摘したように、「台湾も中国も伝統文化を大事にしなくても、そこにいる中国人は中国人としていられる。しかし、海外の華僑は、獅子舞などをアイデンティティ・シンボルとして大事にしてきた」³⁶⁾。この時期、日本社会での冷遇と差別によって華僑はナショナル・アイデンティティを強め、中国文化に帰属感を求めようとしたのである。獅子舞を通して、彼らは直接感じられない中国文化に触れようとし、獅子舞を広東文化ではなく中国文化として捉えたと考えられる。従って、ナショナル・アイデンティティの形成と共に、華僑は自ら「出身地文化」を超越し、「中国文化」を構築しようとしたのである。

第三期では、両華僑学校の校友会によって受け継がれてきた獅子舞は、相変わらず中国文化のシンボルとされていた。1972年中日国交回復後、日本で急速に高まった中

国ブームの中、華僑は更なる「中国文化」のシンボルを追求し始めたのである。それは、80年代前後北方獅子舞の導入によっても裏付けられた。しかし一方、中日国交回復によって中日間各分野における華僑の役割が顕著になると共に、華僑は日本での定住を選択するようになった。獅子舞に携わっているのは三世、四世の華僑が多く、彼らが抱いていた中国認識は華僑学校で受けた、限られた教育に基づいたものであった。従って、中国ブームという、作られた外部条件を利用し、自らイメージした「中国文化」に基づき、商売や文化活動において積極的に「中国的」なものをアピールしたのである。1972年中日国交回復と1979年の中国の改革開放を通じて、故国との距離が狭まる一方で、華僑文化と華僑・華人アイデンティティの形成が促されていった時期でもある。

第四期では、横浜華僑は、東南アジアの華僑・華人から現代風の南方獅子舞を習得することによって、世界の華僑・華人との交流を深めているが、これはグローバルな華人アイデンティティの広がりを示している。広東などの獅子舞チームも同じく世界獅子大会に出場しているにも関わらず、横浜の獅子舞チームがマレーシア華人から指導を受けることは、最も横浜華僑の意識変化を示した例である。

杜維明 (Tu Wei-ming) は、中国本土や華人の散在する地域及び中国に関わる非中国系人という三つの象徴的世界 (Symbolic Universe) の継続的な相互関係によって「文化中国 (Cultural China)」が形成される、と述べた (Tu : 2001)³⁷⁾。中国は「文化中国」の一構成員でしかなく、むしろ他の構成員

なしではその発展は困難であると社は主張する。筆者は社の観点到同意する。中国人は、必ず中国大陸・台湾のアイデンティティを持つものであり、中国文化イコール中国大陸・台湾で育まれた文化のような、一元的な思考様式は通用しなくなった。中国人は様々なアイデンティティを持ち、中国文化も中国大陸・台湾・香港などを含む広義な概念と捉えるべきである。従って、第四期において横浜華僑は、世界の華僑・華人との交流を重ねていくうちに、より広汎な中国文化と接触し、グローバルな華僑・華人アイデンティティを形成していった。中国文化の定義も、中国、台湾本土の文化も含む、世界中に散在している華僑・華人によって伝承され、あるいは新たに創出された文化総体だと改めるべきであろう。そうならば、横浜華僑による獅子舞などの文化は、まさに中国や台湾と直接結ばれる狭義の中国文化の輪を超え、より広汎でダイナミックな中国文化の一例といえる。

その一方で、このグローバルな華人ネットワークを支えている構成単位は、地域に根ざしたローカルな華僑意識であることを見落とすべきではない。とりわけ、日本社会に定住するようになった華僑が、日本や中国といったナショナルな次元ではなく、横浜というローカルなところから華僑アイデンティティをとらえなおしていることは注目される。たとえば、華僑青年会龍獅団のある団員は以下のように語ってくれた。

もちろん私は中国人である。「あの中国人が経営している店舗は」どうこうとお客さんからよく言われるし。だけど、向うの中国人や最近日本に来た中国人と違う。私は横浜に生まれ育ち、

横浜は住み慣れた土地だし、自分は横浜中華街で生きている中国人だと思う。獅子舞は、13歳から始めた。踊っていて血が騒ぐとを感じる。横浜の華僑文化として後代に伝えていくべきだと思う。(L・Z氏、華僑三世、25歳、中華街で中国菓子の製造販売店経営)⁸⁾

中国人であるアイデンティティを持ちながらも横浜あるいは日本以外の中国人や華僑と明確に区別するL・Z氏のローカルな華僑意識は、他の華僑青年の話からも窺われる。これはまさに「『中国人である』意味そのものは変質している」(Tu 1994: 8)という杜維明の指摘と一致している。こうして、獅子舞に携わっている若者たちへのインタビューから窺われるように、横浜華僑は「中国人」アイデンティティを持っていても、文化上は中国や台湾の中国人と区別している。また、日本人とも区別し「横浜に定住する中国人」と自己定位しながら、意識的に独自の華僑文化を創出しようと努めているのである。時代を通じて地域の華僑社会を担い、活性化してきたのも、まさにこのようなローカルな意識といえよう。

日本の華僑・華人は日本社会の周知的な存在として自ら民族的・文化的アイデンティティを確立・維持するために、「華僑文化」を創出した。上述した獅子舞伝承の変遷からも窺われるように、獅子舞は出身地文化であったり、中国文化であったり、更に華僑文化と変わってきたが、横浜華僑のアイデンティティのシンボル、つまり別の出身地集団や日本人社会と区別するための文化的シンボルとして継承されてきたのである。

因みに、獅子舞の継承者に現れた新華僑は、華僑の伝統文化を伝承していくのに欠

かせない存在であるに違いない。この意味では、獅子舞を含む華僑文化は途絶えることなく伝承されていくだけでなく、華僑社会の新旧交替に伴い、更に新たな「華僑文化」が創出されていくだろう。

おわりに

以上、考察してきたように、横浜華僑の獅子舞は、出身地広東との直線交流に過ぎなかった第一期から、第二期、第三期の閉鎖的時期を経て、第四期で世界華僑と結びつくにいたっている。これらの過程は、横浜華僑の文化的帰属の一部である獅子舞が、中国にある故郷から離脱し、中日断交期間の想像上の中国文化を経て、広義の意味合いを持つグローバルな中国文化までに変化していつていることを示している。

ホスト社会日本からみれば、華僑は常に中国文化の代表者であり、担い手であるが、華僑自身の中国文化観やアイデンティティは変化と柔軟性に富んでいる。また、出身地文化から中国文化、華僑文化への変化・創造過程に明確な境界線を引くのは不可能である。まして、「中国文化」自身の意味合いも常に変化している。これまで見てきたように、華僑のアイデンティティの変化が、そのシンボルとされる「中国文化」への意識を左右してきたことが、獅子舞の伝承過程からも見て取れる。また、華僑のアイデンティティの多元化とともに、定住先の都市や国ごとにローカルな華僑文化が創出され、各地の華僑同士の交流を通じてグローバルな華人アイデンティティも生まれつつあることが、今回の考察から明らかとなった。

華僑文化の振興に、日本の地域社会が直

接的・間接的に及ぼす影響は実に大きい。華僑を取り巻く時代ごとの社会条件が、華僑文化の伝統性の保持と共に、パフォーマンス化をも促進してきたのである。一方、華僑側も自ずと日本社会に同化するのではなく、中国文化、華僑文化を復興させ、理解を広げようと、華僑に限らず日本人をも対象に積極的に獅子舞や民族舞踊を教えている。これらの中華街を中心として起こった現象は、華僑社会と日本社会の相互関係を再認識する手がかりとして今後とも注目すべきであろう。

注

- 1) 中国政府は中国国籍所有者を「華僑」と呼ぶのに対し、居住国の国籍を取得したものを「華人」と呼び、区別する。また、海外中国人に対する呼称は、研究者によって「華僑」や「華人」、「中国系人」、「チャイニーズ」、「華人ディアスポラ」など様々であるが、日本の研究界では最近「華僑・華人」と一括して呼ぶ傾向がある。本稿では、獅子舞を担ってきた中国人の中に、すでに日本国籍を取得したのも多くいるが、彼らの中国文化への帰属意識に同一性が見られるため、特別に強調しない限り、「華僑」という言葉を使っている。なお、中国の改革開放により80年代から増加した中国人のことを「新華僑」と定義し、彼らと比較する場合、従来の華僑のことを「老華僑」と呼んでいる。
- 2) 横浜華僑総会「横浜青年会龍獅団」<http://www.aurora.dti.ne.jp/ryusidan/> (2002年7月25日参照)
- 3) 香港大学学生会中国武術学会「獅芸」http://www.hku.hk/cmaclub/resource-center/main-resource_gb.htm (2002年8月28日参照)
- 4) 太平楽亦謂之五方師子舞...綴毛為之、人居其中、像其俛仰馴狎之容。二人持繩秉拂為習弄之狀。五師子各立其方色、百四十人歌太平楽、舞以足。持

縄者服飾作崑崙象。

- 5) 戯有方獅子、高丈余、各衣五色；每一獅子、有十二人、戴紅抹額、衣畫衣、執紅拂子、謂之獅子郎。舞太平樂曲。『樂府雜錄』守山閣叢書
- 6) 北方獅子舞は揚子江以北の華北を中心に広まり、今では民間以外にも雑技（中国サーカス）の演目として有名である。金色の頭と長い毛を付けた着ぐるみをまとい、玉乗りをしながらシーソーを越え、アクロバティックな動きと可愛らしい踊りを披露する。南方獅子は広東省を中心とした中国南部で盛んである。外見の特徴は大きな獅子頭、体は一枚の布で金、銀、赤、黒、ラメなど限りがない。また中国武術とも深く関係し、動きはより奔放である。
- 7) 呉勝達によれば、獅子舞（北方獅子舞も含む）は主に三つの機能を有していた。農業社会における農民達の娯楽のほか、宗族間の親睦を促進すること、そして武術を習得することによって政府から保護を得られなかった民衆が自衛を図る助けとなること。更に、外観は魔よけしながら瑞祥を齎す靈獣とされる「一角獣」と「狡狴」（両方とも伝説の中の猛獣）に似ていることから、獅子舞は邪気を追い払う目的をも併せ持って踊られていたという（呉2002：26-28）。
- 8) 関羽の誕生日は地方によって陰暦の5月13日とも6月24日とも伝えられている。中国本土や他国の華僑・華人コミュニティでも、地方によって5月13日か6月24日に「関帝誕」が行われている。「関帝祭」は「関帝誕」と同一のものであり、「関帝誕」の日本語の表現として使用されていたのではないかと考えられる。尚、90年代関帝廟の再建と共に復活した「関帝誕」は今現在陰暦の6月24日に行われている。
- 9) 「仏山関帝誕」<http://www.fslib.com.cn/fsbook/fszn/fsms/ms40.html>（2002年8月29日参照）
- 10) 「親仁会」は1898年に成立した広東幫有力商人の

- 相互扶助・親睦のための団体である。「要明同卿会」は1917年広州府高要、高明両県出身の料理職人が設立した組合である。「四邑公所」は1919年広東広州府新会・新寧両県及び肇慶府の恩平・開平両県出身者が相互親睦、救済の目的で設立された。
- 11) 王維も（王2001：222）演劇や龍舞、獅子舞などの芸能の一部は和親会によって継承されたのではないかと記している。
 - 12) 三江公所は、江西、浙江、江蘇出身者によって1897年設立された。横浜の龍舞は三江公所によって始められ、また戦後、三江公所によって復興された。
 - 13) 1949年から1972年までの間、中日間に国交がなく、中国人の新たな来日と在日華僑の帰国は不可能であり、華僑と中国本土のあらゆる交流は途絶えていた。従って、華僑が獅子舞や演劇を復興しそれを維持していくためには、香港と横浜港を往来していた船員の存在が不可欠であった。
 - 14) 1952年、中国と台湾のイデオロギーの対峙は先に華僑学校で顕現化し、「学校事件」が起こった。学校から追い出された大陸支持の教員は生徒600余名と共に、1957年山手町にて新たに校舎を建設し「山手中華学校」を開校した。一方、分裂後の「横浜中華学校」は、1968年に「横浜中華学院」と改名した。前者は「大陸系」、後者は「台湾系」と呼ばれている。
 - 15) 日本赤十字社、日中友好協会などの交渉により、帰国希望者は中国在留日本人の引き揚げ船に無料で乗船することになった。53年興安丸で帰国した人数は前後三回で、2649人に及ぶ。更に55年508人、56年412人が帰国。在日留学生や日本での生活貧困者と共に帰国したのは、大学生、高校生がほとんどである在日華僑子弟である。彼らは帰国後、大学教育を受け、政府部門、教育関係、研究機関などの分野で日本関係の仕事に従事、改革・開放後その活躍はより顕著となっている（可児他編

在日華僑の「中国文化」観と華僑文化の創出

- 2002 : 237 & 494)
- 16) 華僑総会は、唯一華僑の日常業務を行う公的機関である。しかし、当時、パスポートの登録は勿論のこと、出生や結婚証明などの手続きを依頼する際、意思表示の書類を書かなければ受け付けてもらえなかった。華僑総会の元役員繆順馨氏へのインタビュー（2002年8月）による。
- 17) 分裂する前存在した横浜中華学校の卒業生によって1951年5月に創立された。大陸系。1957年山手町に校舎が建設され、横浜山手中華学校と改名してからも、校友会は、設立当時の横浜中華学校校友会を名乗っている。現会長は謝成発。（可児他（編）2002 : 788）
- 18) 横浜中華学校校友会会長であると同時に、中華青年会の役員でもある。中華青年会のメンバーは同郷会や校友会、華僑総会などの会員や役員で、同時に複数の会に属している者も少なくはない。このような会を通して獅子舞の指導やイベントの企画に参加している（王2001 : p.231）
- 19) 龍獅団団長唐朱維氏（華僑二世、38歳）へのインタビュー（2002年8月）による。
- 20) 唐朱維氏へのインタビュー（2002年8月）による。
- 21) 新華通訊社 新華網「舞龍舞獅：無中生有成瑰宝」
<http://202.84.17.73/sport/htm/20001029/190335.htm>（2002年8月26日参照）
- 22) 特に、80年代武術の「梅花粧」（何本かの柱の上を飛んだりするなど高難度の動作）を導入し、それに合わせようと、獅子の身体を短く、頭を小さくした上、足（踊り手のズボン）を毛の付いたものに改めた。模様も金色を多く取り入れたものとなった。踊りの基本はほぼ変わらないが、獅子というイメージと技法重視の観点から、従来と違って、頭は獅子から出さず、獅子の口が開くときしか外の様子を見ることができないようにした。唐朱維氏へのインタビュー（2002年8月）による。
- 23) 2002年8月、横浜にて行われたインタビューに応じてくれた何人かの方は、在日華僑は文化大革命の余波しか経験しなかったが、本土で起こった知識人への圧迫や伝統文化へ破壊に対し、怒りと無念さを感じると話している。
- 24) 雲頂集団「雲頂世界舞獅錦標賽簡史」http://www.genting.com.my/ch/live_ent/2000/lion-dance/history.htm（2002年8月26日参照）
- 25) 唐朱維氏へのインタビュー（2002年8月）による。
- 26) 唐朱維団長の話によれば、中学生の段階では、心身共に未熟なため、高難度な動作を控えさせているという。
- 27) 80年代より留学生として新たに来日した中国人は学業を終えた後も日本の会社への就職や自ら事業を興すことによって日本に定住し、いわゆる「新華僑」を形成した。彼らは経済的な原因で最初は子どもを公立学校で教育を受けさせるが、経済的基盤が築き上げられると、子どもを私立学校や華僑学校に送るのが一般的である。山手中華学校でも80年代後半、特に90年代から「新華僑」の子供の増加が目立つようになった。
- 28) 横浜華僑総会『横浜華僑通訊』3月号、2002年。横浜山手中華学校の統計にある「老華僑」と「新華僑」は中国国籍所有者であり、「華人」は日本国籍取得者及びその子孫を指す。なお、ほかの22%は日本人や韓国、イギリス国籍の子どもである。
- 29) 横浜華僑婦人会会長、繆順馨女史へのインタビュー（2002年8月）による。
- 30) 校友会にて来日一年の台湾出身の陳氏兄弟へのインタビュー（2002年8月）による。
- 31) 南方獅子舞の二大分類に、仏山獅子舞と鶴山獅子舞がある。それぞれ広東仏山地区と鶴山地区を中心として発展してきた。
- 32) 例えば、獅子パレードの途中に「青獅」（獅子王）に会った「七彩獅」（雌獅子）は進んで道を譲るとか、違う獅子チームに会ったとき、互いに道を譲り、リーダーは名刺交換を行うなどチーム内とチ

ーム間に明確な上下関係と礼讓関係が決められている。鶴山獅子舞は東南アジアで人気が高く、特にシンガポールでは「獅子王」と名譽付けられている。

- 33) 唐朱維氏・謝賢栄氏へのインタビュー (2002年8月) による。
- 34) 謝成発氏及び唐朱維氏への電話インタビュー (2002年12月) による。
- 35) 謝成発氏への電話インタビュー (2002年12月) による。
- 36) 謝賢栄氏へのインタビュー (2002年8月) による。
- 37) 「文化中国 (Cultural China)」は 中国大陸、台湾、香港、シンガポールなど「中華」文化と中国系人を主として形成された社会と、海外に散在している政治的にも人口的にもマイノリティである中国系人 (Chinese Diaspora) 学者、ジャーナリスト、企業家など「中華」文化や「中華」世界に関連した事物に興味を持つ中国系人でない個々人、の三つの象徴的世界 (Symbolic Universes) の継続的な相互関係によって形成されるという (Tu 1994 : 13)。
- 38) 山中中華学校卒業生、龍獅団団員へのインタビュー (2002年8月) による。

参考文献

- 陳天璽 . 2001 . 『華人ディアスポラ - 華商のネットワークとアイデンティティ』 明石書店 . Hobsbawm, Eric, and Terence Ranger eds. 1983. *The Invention of Tradition*. Cambridge University (前川啓治・梶原景昭訳 . 1992 . 『創られた伝統』 紀伊国書店) .
- 本田安次 . 1992 . 『アジアの伝統芸能』 錦正社 .
- 可児弘明他 (編) . 2002 . 『華僑・華人事典』 弘文堂 .
- 劉志文 . 1993 . 『広東民俗大観』 広東旅行出版社 .
- 尾上兼英 . 1983 . 「日本の華僑社会における芸能の変容」 山田信夫編 『日本華僑と文化摩擦』 369-398 .

巖南堂書店 .

- 田仲一成 . 1981 . 『中国祭祀演劇研究』 東京大学出版会 .
- 田仲一成 . 1989 . 『中国郷村祭祀研究 : 地方劇の環境』 東京大学出版会 .
- Tu Wei-ming. 1994. "Cultural China: The Periphery as the Center," Tu Wei-ming ed. *The Living Tree: The Changing Meaning of Being Chinese*, Stanford, California: Stanford University Press.
- 内田直作 . 1949 . 『日本華僑社会の研究』 同文館 .
- 王維 . 2001 . 『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ - 祭祀と芸能を中心に』 風響社 .
- 呉騰達 . 2002 . 『台湾民間芸陣』 晨星出版社 .
- 山下清海 . 1979 . 「横浜中華街在留中国人の生活様式」 『人文地理』 31-4 : 33-50 .
- 葉春生 . 2000 . 『広府民俗』 広東人民出版社 .
- 葉春生 (編) . 2001 . 『嶺南民俗事典』 南方日報出版社
- 横浜中華学院校友会 . 1997 . 『横浜中華学院校友会会報』
- 横浜華僑總會 . 2002 . 『横浜華僑通訊』 3月号
- 横浜開港資料館 . 1994 . 『開港から震災まで 横浜中華街』 横浜開港資料館 .
- 横浜市役所 (編) . 1932 . 『横浜市史稿 風俗編』
- 鍾敬文 . 1991 . 「洪水後兄妹による人類再繁栄の神話」 『日中文化研究』 1 : 7-21 . 勉誠社 .
- 横浜華僑總會 「横浜青年会龍獅団」 <http://www.aurora.dti.ne.jp/ryusidan/> (2002年7月25日参照)
- 「仏山開帝誕」 <http://www.fslib.com.cn/fsbook/fszn/fsms/ms40.html> (2002年8月29日参照)
- 雲頂集團 「雲頂世界舞獅錦標賽簡史」 http://www.genting.com.my/ch/live_ent/2000/liondance/history.htm (2002年8月26日参照)
- 香港大学学生会中国武術学会 「獅芸」 http://www.hku.hk/cmaclub/resource-center/main-resource_gb.htm (2002年8月28日)

在日華僑の「中国文化」観と華僑文化の創出

新華通訊社 新華網「舞龍舞獅：無中生有成瑰宝」

[http://202.84.17.73/sport/htm/20001029/190335.](http://202.84.17.73/sport/htm/20001029/190335.htm)

htm (2002年8月26日参照)

聯合早報「舞獅采青 世代接力」[http://www.](http://www.zaobao.com/zaobao/chinese/region/singapore/festival/singapore_festival270101a.html)

[zaobao.com/zaobao/chinese/region/singapore/fes](http://www.zaobao.com/zaobao/chinese/region/singapore/festival/singapore_festival270101a.html)

[tival/singapore_festival270101a.html](http://www.zaobao.com/zaobao/chinese/region/singapore/festival/singapore_festival270101a.html) (2002年8月

29日参照)